



TITLE:

うどんとモダン ー豊中市岡町に
おける都市民俗誌のころみー

AUTHOR(S):

菊地, 暁

CITATION:

菊地, 暁. うどんとモダン ー豊中市岡町における都市民俗誌のころみー. 人文學報 2000, 83: 195-225

ISSUE DATE:

2000-03

URL:

<https://doi.org/10.14989/48538>

RIGHT:

うどんとモダン

— 豊中市岡町における都市民俗誌のこころみ —

菊 地 暁

はじめに マチバ（商業地域）としての豊中市岡町のようなすを、商家の暮らしを中心に描き出すことが本稿の目的である。ところがこれは容易ならざる課題だ。商家の暮らしは業種によって千差万別、仕事の手順から商売関係にいたるまでまったく異なってしまうからである。岡町で商売を営むすべての商家について述べることは不可能だ。

そこで本稿では、岡町最古の老舗うどん屋「土手嘉」の商売と生活に焦点をあてながら、岡町の成り立ちから現在に至るまでの移り変わりを考えてみたい。土手嘉が岡町の商家の一つにすぎないにもかかわらず、ここで取り上げるのにはいくつかの理由がある。まず第1に創業の古さである。江戸時代の中ごろに創業した土手嘉は、おそらく岡町に現在も続いている商家の中では最も古いもので、岡町の歴史を考えるのにふさわしい参照点となるからだ。第2に土手嘉のロケーションの良さがあげられる。岡町はもともと能勢街道沿いに発展した商店街であるが、明治43年〔1910〕の有馬箕面電気軌道（後の阪急宝塚線）の開通を契機として、駅前から能勢街道に至る道にも商店街が形成された。さらに市役所の移転にともないこの道が延長され、戦後にアーケードが作られたことによって、現在は岡町のメインストリートとなっている。土手嘉はこの双方の道路に面しており、さらにその正面には原田神社がひかえている。土手嘉は岡町の地理を考える上でも恰好のポイントになるのだ。第3に土手嘉のもつ商売関係の広さがあげられる。戦前の土手嘉は、豊中市域の中部から北部にかけて、広範囲にうどんと氷の配達を行っていた。そのため、岡町と周辺地域の関係を考える際にも、土手嘉は好都合なのである。

注意してほしいのは、土手嘉が必ずしも岡町の「典型的」あるいは「標準的」な商家ではないということである。ここで土手嘉を取り上げるのは、あくまで岡町をさぐる糸口としての役割を、土手嘉の商売と生活、その過去と現在の姿に期待したためだ。

なお、ここに記された内容の大部分は、土手嘉第7代店主の畑嘉道さん（大正12年〔1923〕生れ）からの聞き取りによるものであり、本文中の括弧（「 」）内の表記は、嘉道さんの発話から採ったものである。

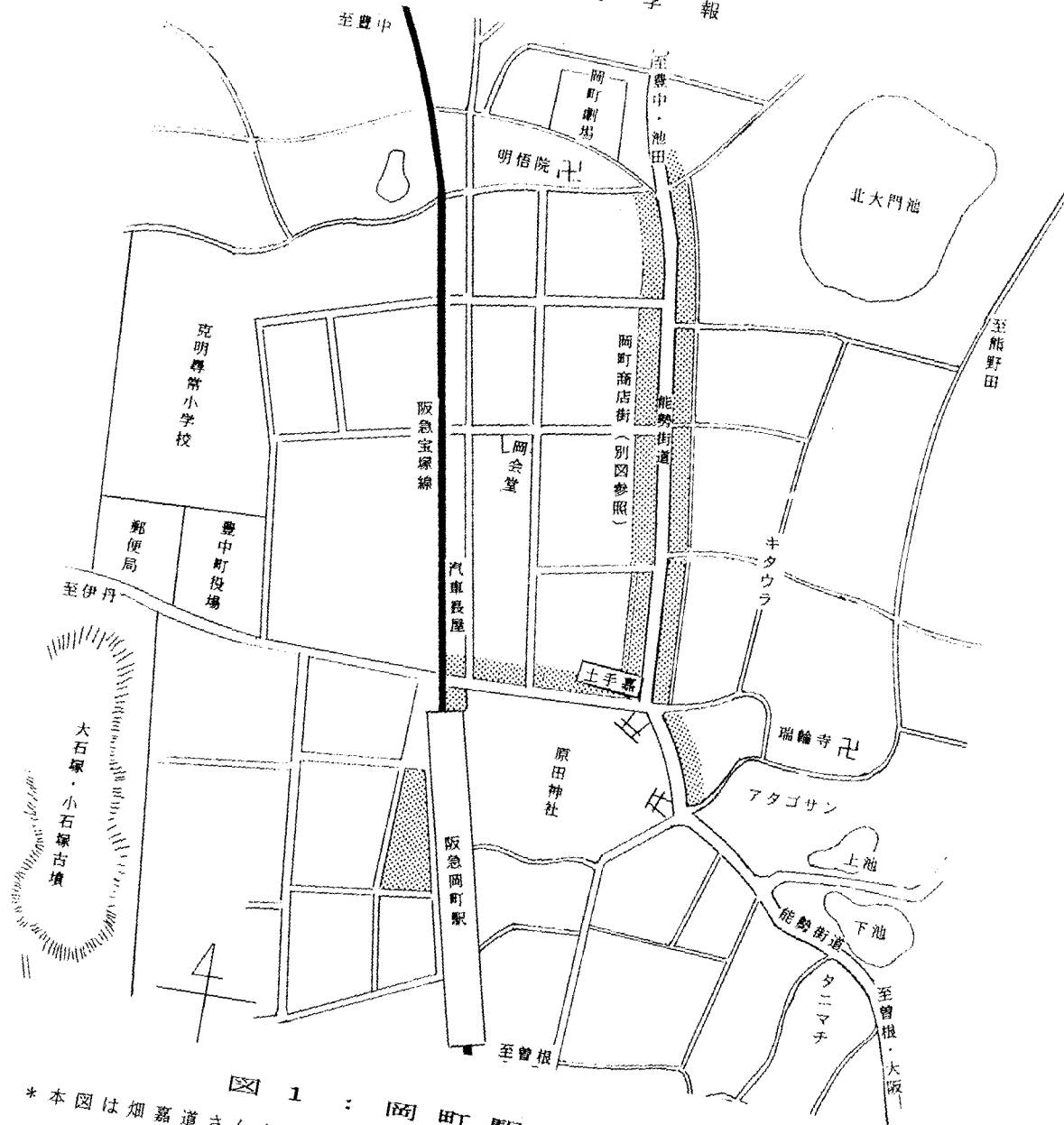


図 1 : 岡町駅周辺図

* 本図は畑嘉道さんからの聞き書きをもとに再構成した大正末から昭和初期にかけての岡町駅周辺を示したものである。街路の配置については「大日本職業別明細図」（昭和6年刊）を参照した。

土手嘉の創業 岡町は上新田・熊野田から伊丹方面を結ぶ伊丹街道と大阪から池田・能勢を結ぶ能勢街道の交差点に位置している。この交通上の利点を生かしてマチバとしての岡町が形成されたのは江戸時代の寛文年間〔1661-1673〕の頃であった。この地にうどん屋「土手嘉」が創業したのは江戸時代も半ば、岡町がまだ「岡」と呼ばれていた頃だったという。

創業の経緯はこんなふうだ。昔、丹波の笹山藩の藩士だった3兄弟が、藩主にとある品物の探索を命じられて大坂まで出てきた。ところがその品物は見つからない。手ぶらで帰るわけにも行かないので、岡町周辺に落ち着き、身分を隠すために商売を始めることにした。その際、3兄弟はそれぞれ、八百嘉、八百伊、八百清の屋号を名乗るようになった。この八百嘉が始めたうどん屋が現在に続く土手嘉の起りである。もっとも、祖父・嘉吉からそのように伝えられているものの、「身を隠した者」が実際のことを言うわけもないので、とりあえず「そういうことになったんですわ」と嘉吉さんは語る。

創業当初は、うどんのほかに、能勢街道を往来する客を相手に酒の販売も行っていた。やがて、店の向いにある原田神社を取り囲んでいた土手（玉垣のこと）にちなんで「土手嘉」を店名とするようになった。ちなみに、八百伊は現在も桜塚に続いているが、八百清は行方がわからなくなっている。3家とも明治以降は「畑」姓を用いているが、これは丹波笹山地方に多い名字だという。

うどん屋を起こした初代は嘉吉を名乗った。その後は2代嘉助、3代嘉吉、4代嘉助、5代嘉吉、という具合に嘉助と嘉吉を交互に名乗っていった。嘉道さんの父・6代秀美は「嘉」の字を用いていないが、8人いた兄弟のうち2人が「嘉」の字を用いた名前だった。7代嘉道さんの4人の子供たちには「嘉」の字を用いた名前はない。6代秀美とその兄弟、7代嘉道さんとその子供たちの名前は、易学の素養もあった原田神社の先代宮司に付けてもらったものである。



▶過去帳を前にする
土手嘉第7代店主・畑嘉道さん。
平成7年（筆者撮影）

祖父・嘉吉の時代 嘉道さんの祖父・第5代嘉吉が生まれたのは慶応元年〔1865〕である。世は江戸から明治への御一新であり、土手嘉を取り巻く岡町のような土手嘉の仕事も大きく

移り変わっていった。この時期の土手嘉を担ったのが嘉吉である。嘉吉には腹違いの兄があったため、もともと店を継ぐ予定はなく、大阪府立勝山農学校の養蚕科を卒業した後はしばらく岡町を離れて暮らしていた。ところがさまざまな事情で土手嘉の財産を二つに割って腹違いの兄が分家することになり、結局本家は嘉吉が継ぐことになった。

嘉道さんいわく、嘉吉は世話好きで、珍しいもの好きな人物だったという。そのためそれまでのうどん屋業に加えて、多くの新事業に乗り出すことになった。文明開化の代名詞であるガス灯や新聞の販売業務などにも乗り出した。新聞販売店は大阪北郊・三国以北では最初のものであったという。これらの事業が軌道に乗るとともに、それを人出に渡してしまい、再び新しい事業に挑戦する、というのが嘉吉のやり方だった。

そんな嘉吉の始めた事業で今でも続いているのが氷の販売である。開業当時は大阪の製氷会社から氷を仕入れ、荷馬車に積んで能勢街道沿いを十三から池田まで売り歩いた。淀川以北では最初の氷販売業者だったという。そのうちに十三以北の地域に製氷会社ができ、また仕入れ先との行き違いなどもあったので、昭和8年〔1933〕頃に桜塚に製氷工場を作り製氷・販売を一貫して行うようになった。

氷を利用してアイスクリームの製造と販売も行った。最初はかち割りの氷に塩を加えてかき混ぜながら冷やすという作り方だったため、現在のアイスクリームのようななめらかなものにはならず、シャーベットに近いものだったという。後に自前の製氷工場ができるとアンモニア冷凍機を利用して作るようになった。阪急沿線でもかなり早くから始められたもので、土産に買っていく人も多かったという。このアイスクリームは戦時中の食糧統制が行われるまで続けられた。

嘉吉の時代、岡町の暮らしに最も大きな変化を与えたできごとは、明治43年〔1910〕の箕面有馬電気軌道（後の阪急宝塚線）の開通である。この開通は郊外住宅地としての豊中市域の発展を決定づけた。岡町では、駅から能勢街道に至る原田神社境内北側の通りに商店街がつくられた。この並びの商店の多くは、大正から昭和初期にかけての創業である。缶詰屋の主人は、鉄道建設の際に人夫頭として九州から人夫を引き連れてやってきた人物で、開通後に岡町で商売を始めたのだという。交通の便が良くなったので、役所・警察署・郵便局などの公共施設も岡町に集まるようになった。

嘉吉は岡町の理事や原田神社の氏子総代なども歴任し、町の世話役としても活躍した。嘉道さんが生まれたのは大正12年〔1923〕、祖父にはずいぶんとかわいがられて育ったという。嘉吉は終戦の年、昭和20年〔1945〕に78歳で亡くなった。

子供の行事 嘉道さんが生まれると、その年の5月5日の初節句には、母方の実家から武者人形が届けられた。長男が生まれると、その初節句に母方の実家から武者人形を持ってくると

うどんとモダン (菊地)

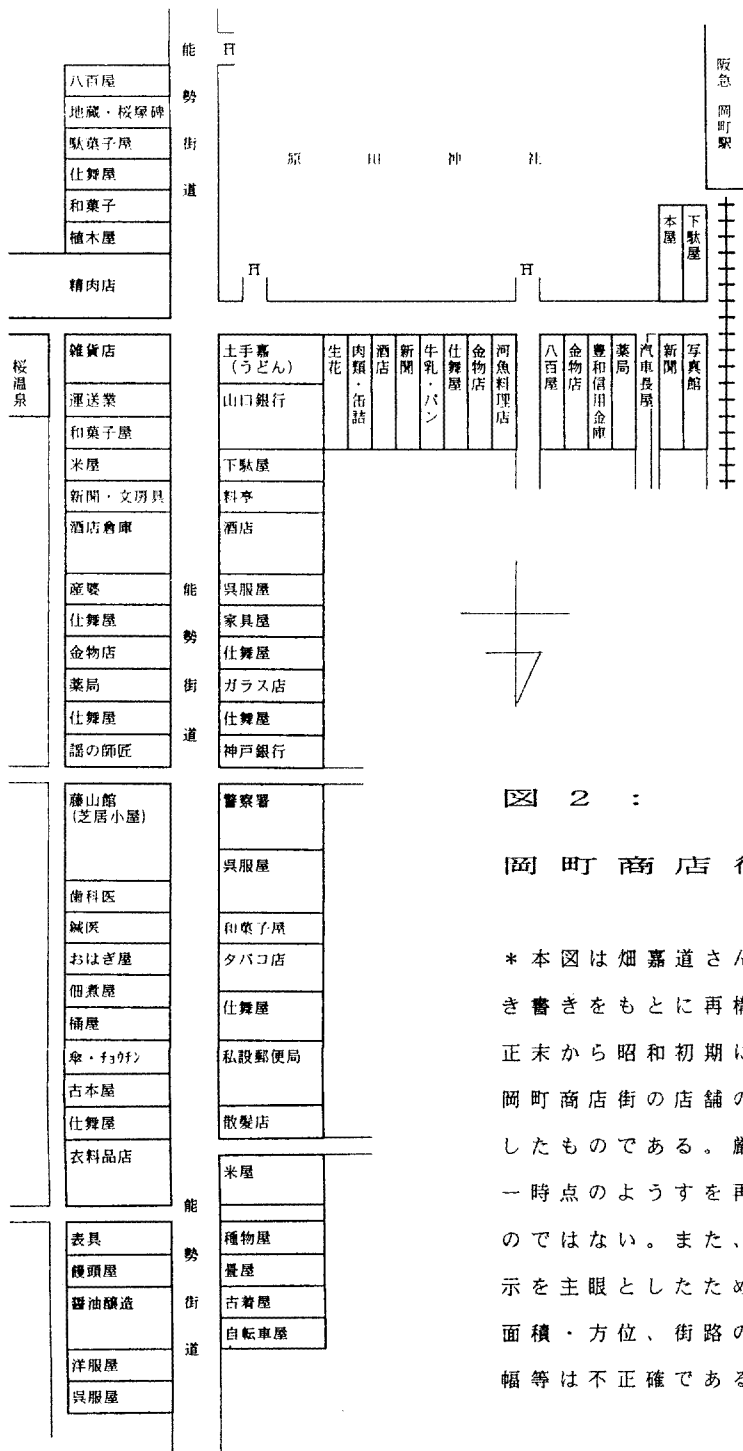
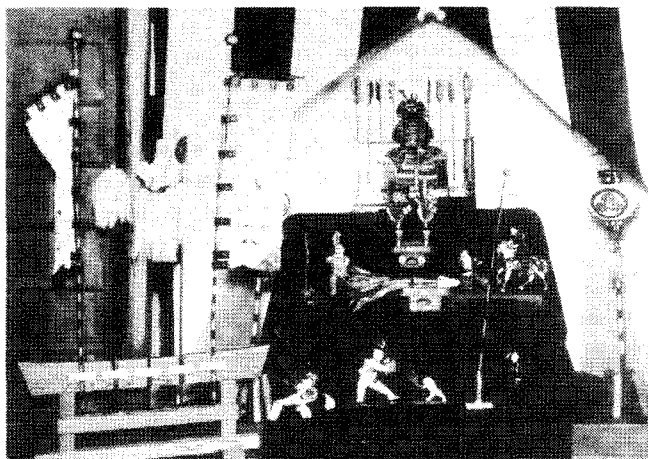


图 2 :

岡町商店街略図

* 本図は畑嘉道さんからの聞き書きをもとに再構成した大正末から昭和初期にかけての岡町商店街の店舗の配置を示したものである。厳密にある一時点のようすを再現したものではない。また、業種の表示を主眼としたため、店舗の面積・方位、街路の方向・路幅等是不正確である。

というのが「このへんのしきたり」だった。嘉道さんの場合にも、よろい、かぶと、刀、弓、こいのぼり、武者の姿を描いた武者旗などが池田にある母方の実家から贈られている。同様に、長女が生まれると、その初節句（3月3日）に母方の実家から雛人形を持ってくるようになっていた。この雛人形は、長女の嫁入りまで壊れなかった場合には、嫁入りの際に持って行って嫁ぎ先で生まれた長女に受け継がれた。もっとも、土手嘉の場合はうどん屋という商売柄、建物に湿気がこもるため、雛人形が嫁入りの時まで無事であるということはあまりなかったようだ。



▲嘉道さんの初節句に母方の実家から贈られた五月人形。
大正12年（畑嘉道氏所蔵）

3月末から4月初めには菜種の花見が行われた。田植え前の季節である。当時、商店街の裏はすぐに田んぼが広がっていた。近所の人連れ立って、近くの田んぼのあぜに行き、菜の花を見ながら酒食を楽しんだ。嘉道さんの子供の頃は、うどん屋の仕事をしていますので家族で一緒に行くことはなかったが、弁当を作ってもらって、近所の家族と一緒にいった。

9月の月見にはダンゴ突きをした。よその家へしのびこんで縁側に置いてあるダンゴを長い竿で突き刺して取ってくる。ついでに庭に植えてある柿なんかを取っていくこともあった。「子供の時分はよう悪いことしましたよ」と嘉道さんは語る。

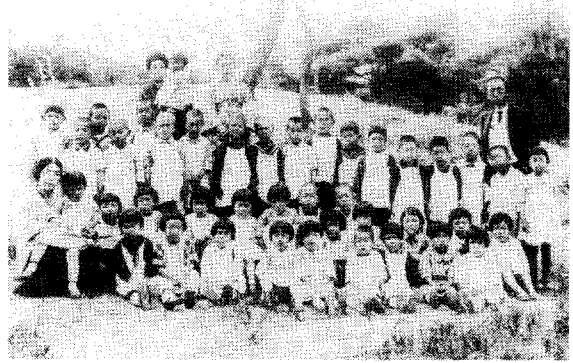
子供の遊び 嘉道さんは昭和元年〔1926〕から線路向うにあった金華幼稚園へ通うことになる。帰ってから家にいると仕事の手伝いをさせられるので「逃げて遊んだ」という。嘉道さんの幼稚園から小学校の頃の遊びはこんなふうだ。

よく遊んだのは戦争ごっこだった。岡町や桜塚といった村ごとに、それぞれガキ大将が中心になって組を作り、石や泥を投げ合って相手の陣地を攻め合った。陣地を作るのに好都合だったので、熊野田の竹藪まで行って遊ぶこともあった。当時は熊野田から千里・吹田方面まで延々と竹藪が続いていた。

大石塚・小石塚古墳は今でこそ文化財として厳重に管理されているが、当時は周りを囲む柵もなにもなく、幼稚園のすぐ近くに位置していることもあり幼稚園児の恰好の遊び場だった。

もっとも、当時の大石塚・小石塚古墳は原田神社の管理地で宮司の目も厳しかったので、あまり派手な遊びはできず、鬼ごっこやお遊戯程度だったという。

オミヤサン、つまり原田神社境内も事情は同じで、大きな広場に大きなクスノキがたくさん生えている恰好の遊び場であるにもかかわらず、宮司の目が厳しいのであまり派手な遊びはできなかった。それでも木に登ったりして、「まてっ、こないかぁーっ」などと宮司にどなられることもしばしばだったという。オミヤサンには紙芝居も来ていた。1銭払ってアメなどのお菓子を食べながら見た。出しものは「黄金バット」や「のらくろ」などだった。



▲金華幼稚園の子供たち。大石塚・小石塚古墳にて。
大正末年？（畑嘉道氏所蔵）

能勢街道沿いにあった「藤山館」という芝居小屋も遊び場だった。もともとドサまわりの歌舞伎のためのもので、舞台や桟敷席が作られていた。嘉道さんの子供の頃には歌舞伎の公演に使われることはなく、もっぱら子供の遊び場で鬼ごっこやかくれんぼをした。また、現桜塚ショッピングセンターの位置には、もともとアタゴサンという小高い丘があり、ここでも鬼ごっこなどをした。

原田神社の北東、能勢街道の東側は街道沿いの商店街をぬけるとすぐに田んぼが広がっていて、キタウラ（北裏）と呼ばれていた。冬ともなると恰好の遊び場で、風あげや鬼ごっこのほか、近所の畑からイモを取ってきて、集めたワラで焚き火を燃やして焼きイモにすることもあった。焚き火のことはトントといった。

場所を選ばず近所でできる遊びとしては、パイがあった。パイとは鋳物でできたけんかゴマである。当時はこのあたりでも木製の石炭箱に残飯を入れて豚を飼っている家が少なくなかった。そこで、その石炭箱を借りて上にゴザをひいて台を作り、その上でパイを回してけんかさせて遊んだ。パイが互いにぶつくと、弱いほうが台の外にはじき飛ばされるのが面白かったという。

近所の池で水泳や魚釣りをすることもあった。当時の豊中にはため池が散在し、岡町の近くにも、下池（現福祉会館・桜塚会館周辺）、上池（現桜塚公園周辺）、ドンドン池（現幸福銀行周辺）などの池があった。現在はいずれも埋め立てられている。池に沿った道路から釣り糸を垂れて魚を釣ったり、泳いだりした。子供のおしめの洗濯に使うこともあったという。下池の能勢街道沿いには池の上に家屋が並んでいた。池の中に柱を建て、入口を街道側に、もう一方

を池の中に向けて、家屋が建てられていた。能勢街道を挟んだ下池の反対側は土地が低くなっており、「タニマチ」と俗称されていた。

岡町から曽根方面へぬける道はくねくねと曲っており「七曲り」と俗称されていた。曽根からさらに南へ行くと服部へと出る。服部へは夕立が降るとうなぎ釣りに行った。今でこそこの辺りは住宅地として発展しているが、当時は曽根と庄内の間に沼地が広がっていた。というのも豊中市東部を流れる天竺川が丘陵地の高いところを流れており、ちょっと雨が降るとすぐにあふれ、その水が丘陵地を下って土地の低い服部近辺に一気に流れ込んだためである。洪水を防ぐために曽根と庄内の間には堤防が設けられていた。その一部は現在も残っている。昭和8年〔1933〕開通の国道176号線はこの堤防を切って通されたため、天竺川があふれた際には国道を通行止にして、堤防を切った部分に板を挟んでいって水を防いだ。そんなところだったので、雨が降ると竿を担いで曽根駅の西側のあたりに行き、うなぎ釣りをしたという。

近所であるにもかかわらず遊びに行くことのなかったのは、現在の豊中幼稚園の位置にあった伝染病の隔離病棟と火葬場のあたりである。隔離病棟はヒビョウイン（避病院）と呼ばれていた。当時は国道176号線より東側には建物ほとんどなく一面に田畑が広がり、かなり遠くからでもこれらの施設を見ることができた。付近には塚や池などの恰好の遊び場があったにもかかわらず、子供たちのあいだでも「向う行くなよぉーっ」と互いに言い合っていたという。この付近が開けてきたのは、区画整理が行われ市庁舎が移転された昭和10年代である。ヒビョウインは昭和10年〔1935〕に桜塚字下原へ、火葬場は旭丘へ、後に上新田へと移転された。

ちなみに、嘉道さんは子供の頃、1日2銭のおこづかいをもらっていた。正月のお年玉は50銭ほどである。当時の物価は、アメ玉1個1銭、土手嘉のうどん1杯8銭、阪急梅田ー岡町間16銭、梅田の阪急食堂のランチ25銭、というところである。おこづかいは桜温泉の隣にあった駄菓子屋などで使うことが多かったという。

学校のように 昭和4年〔1929〕、嘉道さんは克明尋常小学校に入学する。当時の生徒は、もともと地元に住んでいた百姓・職人・商売人などの子供と、鉄道の開通にともなって開発された新興住宅地の子供とに大きく分かれていた。嘉道さんいわく、もともとの地元の子供よりも住宅地の子供のほうが「レベルが上やった」ので「かなわへんかった」。住宅地にはホワイトカラーが多く、それだけ教育にも熱心な家庭が多かったためである。対して商売人の子弟は、宿題をさぼって廊下に立たされることも多かった。当時の学校の先生は竹のムチを持っており、しばしばどつかれたが、先生の権威は絶対で、体罰が問題とされるようなことは皆無だった。実際、親が子供を怒るのでも、「先生に言うぞ！巡査に言うぞ！」というようなせりふだったという。

先生のほうでも住宅地の子供のほうに目をかけることが多かったという。たとえば校舎が南

向きだったりすると、夏は相当に暑くなる。すると勉強のできる子供は廊下側の涼しいほうに座り、できない子供は窓側に座らされることとなった。冬は暖かい窓側にできる子供が、寒い廊下側にできない子供が、という逆の配置になった。また、できる子供は教室の前へ、できない子供は教室の後ろへ座らされた。教室でもそれだけの差別があった。「今あんなことしたらえらいこっちゃでえ」と嘉道さんは語る。

昭和10年 [1935]、小学校卒業後、克明尋常高等小学校へと進学し、昭和12年に卒業する。8年間の義務教育を修了し、その後は家業にいそしむこととなる。その後、昭和14年 [1939] から4年間、16歳から20歳にかけて豊中青年学校で軍事教練などを受けるが、これは店の仕事を続けながらのものであった。

うどん屋の仕事 土手嘉の商売の基本はなんといっても江戸時代創業のうどん屋の仕事である。豊中市域で最も古いうどん屋であり、戦前は店舗営業のほかに、手打ちのうどん玉の卸売も手広く行っていた。「豊中ではウチしかおうどん作っているところなかったですからね、機械やなしに手打ちで、それを全部ウチが持って回っていた時代でしたからね」と嘉道さんは語る。

材料のメリケン粉は「ヤマヨ」という大阪・堂島の粉問屋から仕入れていた。ヤマヨは北摂一帯に得意先を多くもっている粉問屋で、箕面の紅葉天ぶらの粉も卸している。能勢街道を荷馬車を使って粉を運び、卸していくわけである。粉を仕入れて手打ちのうどん玉を作り、それを店舗と卸売でさばくというのが、戦前の土手嘉の商売のやり方だった。このやり方は戦前の食糧統制が始まるまで続けられる。戦後はヤマヨからうどん玉やその他の食材を仕入れて店舗で販売するのみで、うどん玉の製造と卸売は行っていない。ヤマヨの卸売先は加工業者が多く、土手嘉のような小売店への卸売は例外的である。それでも、3代前からという商売関係の長さゆえ、現在でも引き続いて卸してもらっているのだという。その他の食材に関しても古くから商売の続いている仕入れ先が多く、戦後の食糧難の時期などでも「問屋さんと心安かったからね、何でもこう、融通してくれた」という。

店の仕事の分担は、注文を料理場へ通す花番、調理場を担当する板場、皿洗い、店周り、支払を受け取る帳場、配達を担当する外番に分かれた。注文を料理場へ通す花番は1人で、帳場を兼ねることも多かった。伝票を記入することはあまりなく、「何番さん、なにになにー」と口頭で注文を通した。調理場を担当する板場3、4人で、家族が主にこれにあたり、外から雇った職人は1人か多くても2人だった。外から雇われた職人が調理場を仕切るというのが一般的なやり方だが、土手嘉の場合は家族が中心になって仕事を取り仕切り、職人は指示に従って仕事をするということが多かった。家族のほうでも職人と一緒に板場をすることをあまり好まず、職人のほうでもこのようなやり方になじめない人もいたという。ただし家族と打ち解けて家族の一員ようになってしまえば、仕事は非常にスムーズに運んだ。そんなわけで、外から雇っ

た職人は家族との仕事になじめなければすぐに出ていくが、いったんなじんでしまえばずいぶん長く働くことになった。実際、老人ホームに入る年齢になるまで働き続けた職人もいる。皿洗いや店周りは年季奉公で雇われたばかりの者があたるが多かった。配達を担当する外番は若い衆や職人がこれにあたる。大まかにいって、店の中は家族が、店の外は職人や年季奉公の者があたるという分担になっていた。

職人はヘヤと呼ばれる大阪市内の口入屋からの紹介で雇った。ヘヤには既に仕事を習得している職人が登録しており、電話一本で調理でも配達でも行ってすぐに仕事のできるような職人を紹介していた。紹介された職人はまず1週間から10日ほど試しに働かせてみる。それから口入屋が紹介先の店までやって来て、職人にその店で続けられそうかどうかを尋ねる。職人が続けられると言えば、口入屋は手数料を持ってかえる。そういう手順で職人の紹介を行っていた。どんなに腕のいい職人を紹介しても、職人が続けられなければ口入屋は手数料を手に入れることができないので、紹介先の店の特徴を考えて紹介していたという。

とはいうものの、自分の腕をたよりに世の中を渡り歩いていく職人たちには、気質や素性が人並みでない者も少なからずいた。酒を飲んで暴れる者、前科があって刑務所の臭い飯を食べた者、包丁片手にけんかに行く者、などなど。中には手癖が悪く、配達先で盗みを働く者もいた。阪急沿線には高級住宅地が多い。買物の時でも、和服にかっぽう着という軽装ではなく、きちんと洋服で正装して買いに来る客が多かった。そういう家から高価な訪問着や季節物の衣類などを盗んでも、普段使うものではないのでなかなか発覚しないのだという。盗んできた品々は質入れして現金に換えた。そんなふうにして、身一つで働きに来ているにもかかわらず、いつのまにか質札をたくさん持っているような職人もいたという。職人が顧客に対してそそうした場合、質入れした品々を受け出してあやまりに行くのは、「たいていおふくろの仕事やった」という。

年季奉公はヘヤとは別の口入屋から紹介を受ける。口入屋のつての関係で、九州方面から雇う場合が多かった。尋常高等小学校を卒業してから徴兵検査までの期間を、例えば5年なら5年と年季を定めて契約し、その賃金を親元に前払いして子供を奉公人として引き取る。奉公人には衣食住の面倒を見るほかは、こづかい程度のお金しか渡さない。奉公人の仕事のできによってはこづかいも若干増えることもあった。生活に困って年季奉公に出された子供は「えらい恰好」をして土手嘉までやって来た。来るなり着てきた服を全部脱がせて向いの桜温泉で体を洗わせた。着てきた服は捨ててしまい、新しいものに着替えさせて働かせた。

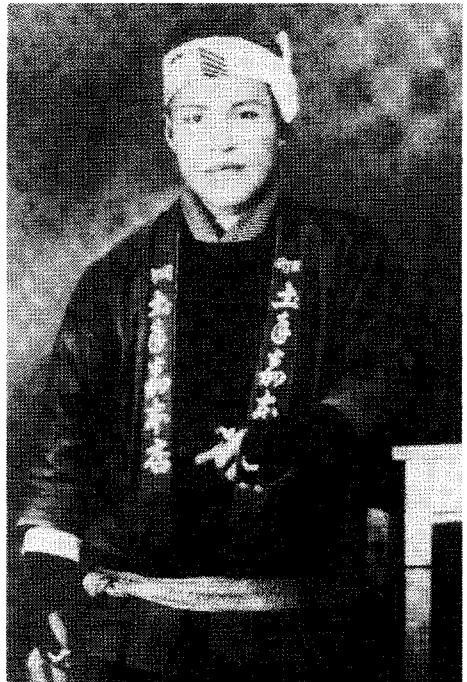
年季奉公はまず最初に皿洗いや、次に店周りの仕事にあたった。これらの仕事を覚えると、次は配達を教えられる。利き腕で自転車のハンドルを握って、反対の腕で「バカダイ」と呼ばれる台を持ち、その上にうどんのドンブリを載せて配達する。バカダイには1段に8つのドンブリを並べ、それを4段まで積み上げるので、最大30食あまりのうどんを1度に載せることにな

る。ドンブリが動かないようにするには台を若干傾けたほうが良いが、あまり傾け過ぎるとうどんの汁がこぼれてしまう。空になったドンブリは軽くてバランスが取りにくいので、うどんの入ったドンブリを運ぶのよりも難しいという。などなど、うどんの配達には熟練した技術が必要で、相当の練習を要する。先輩の教えを請いながら、向いのオミヤサンで欠けたドンブリに水を入れたものを使って練習した。これができるようになるとほぼ一人前と認められるようになり、あとはそのまま外番を続ける者と、板場に入って調理を習得する者に分かれることになる。

土手嘉には豊中と蛸池の2つの支店があり、本店を含めた3店舗で戦前の豊中市域の住宅地の大半を配達した。支店はいずれも大正10年〔1921〕前後の開店である。豊中店は駅前の能勢街道沿いにあり、その場所に銀行ができるまで営業していた。蛸池支店も能勢街道沿いに位置し、これは現在も営業を続けている。岡町の本店のうどんの配達先は、山の上、末広町、岡町北、岡町南、宝山町、桜塚、「カミンチョ」と俗称されていた岡上の町などである。豊中店の配達先は、末広町、立花町、箕輪町、本町、千里園、上野、東豊中などである。蛸池店は豊中店に比べて配達にあたる若い衆が少なかったもので、配達先も蛸池、箕輪、麻田、池田市の一部とあまり広くない。3店舗の配達先はいくつかの地域で重なっているが、それはそれぞれの得意先がその地域で入り組んでいたからである。そのほか、大きな卸先としては、給食用にうどん玉を卸していた刀根山病院などが挙げられる。

配達の若い衆は、多い時では12、3人いた。嘉道さんいわく、「わりと粋な恰好」だったという。上半身は前に物入れのついた腹掛けにはっぴ、下はナガバッチと呼ばれる紺色の細くしまったももひき、足には表が畳地で裏が走りやすいように8つに割れている特別な下駄をはき、頭にはねじり鉢巻き、というようなものであった。住居は嘉道さんの家族とは別で、製氷工場の一角にあった部屋で寝泊まりしていた。現在そこは土手嘉の経営する賃貸アパートになっている。

風呂は向いの桜温泉を使った。昭和2年〔1927〕に建て替えた現在の土手嘉店舗兼住宅にはもともと家風呂がなかった。しかしすぐ目の前に桜温泉があったので「内湯みたいなもん」だっ



▲土手嘉の職人。
年次未詳（畑嘉道氏所蔵）

たという。家族と職人の人数分の風呂代を1月分まとめて桜温泉に払っていた。まとめて払うと多少の割引があった。あとは入りたい放題である。風呂好きな祖父・嘉吉は日に2回入りに行くこともあったという。

余談だが、線路沿いには長屋が作られ雑多な商売が営まれていた。最初の2軒ほどが2階建てで残りの部分は平屋になっており、機関車が客車を引っ張っていく姿に似ていることから、「汽車長屋」と俗称されていた。この長屋の中にカフェがあり、職人たちが仕事をさぼってよくたむろしていた。そんな職人たちを嘉道さんはしばしば呼びに行かされたという。

そんなふうにして年季の奉公人を働かせていたのだが、年季が済むまで働く者はまれだった。身一つで来ているので「ちょっと気走ったやつ」は簡単に店を出ていった。徴兵検査まで働いた者も、その後は音信不通になるものが多かった。中には何年か経ってひょっこり店に顔を出す者もあったが、「だけど案外来んもんやね」と嘉道さんは語る。

仕事は大まかに2部制になっていて、早い者は午前4時頃からうどん玉を作り始める。遅い者は午前11時頃から夜まで働く。氷の仕事も朝早くから始められる。店にのれんを出すのは大体午前10時頃になる。家族の働く時間は職人や年季奉公に比べて柔軟で、店が忙しくなってくると、「忙しくなってきたでえーっ、起きやあーっ」と起こされて働くといった具合だった。

店は梅田午前0時30分発の終電を待って閉められるので、結局午前1時頃まで開いていた。それというのも、阪急岡町駅から降りて熊野田・上新田方面へ帰る人が、土手嘉の店で待合わせして連れ立って帰っていったからである。住宅地の広がった現在では想像しにくいことだが、当時は国道176号線を東にこえと建物はほとんどなく、上新田へ通じる道のまわりは水田がえんえんと続き、見える建物は火葬場とヒビョウインくらい、おまけに土葬の墓地があちこちにあって、気象条件によっては死体に含まれるリンの成分が闇夜の中に青白く燃え上がる、というくらい「なにせさびしい所」で、「皆、気持ち悪う言うて」いた。「亡霊が出たり、キツネやタヌキが出たり」で、ばかされる人もいたという。

もっとも、嘉道さん自身は「実際、ばかされた人もおらんやろけどね」という。理由はこうだ。上新田へ向かう道のそばには肥つぼがたくさんあった。集めてきた肥を運び入れるのには道のそばにあったほうが便利だからだ。大便是軽いので肥つぼの中で自然と上へ浮き上がってくる。それが乾燥してその上に草が生えたりすると、地面とほとんど区別ができなくなる。暗い夜道になると特にそうだ。そんなところへ、酒でも飲んで足もとのおぼつかない人がふらふら歩いていたりすると、足を踏み外して肥つぼに落ちることになる。「そしたらキツネにだまされおった、はまりおったとかね、言われるわけですわ」。ちなみに、肥つぼに落ちた人は、近くのため池で行水して体を洗ってから帰ったという。

そんなこんなで、熊野田・上新田方面へ帰る人は、土手嘉でうどんを食べながら時間をつぶして、連れを待ってから帰った。すると土手嘉では「終〔電〕行きよったでえ」「閉めようかあ」

といって店の後片付けに取りかかる。後片付けに手間取っていると、そのうち早番の人が起きてうどん玉を作り始める。結局、24時間、だれかかれかが働いているといった具合だったという。

うどんの仕事が忙しい時期は、誓文払い、原田神社例祭、年末などである。誓文払いとは12月1日から3日間、岡町商店街で行われた年末大売り出しのことである。能勢街道の通る北摂地域には、街道沿いに三国、岡町、池田などの商店街があった。そのうち岡町は旧豊中市域でただ一つの商店街であり、「ない物はない」というぐらいの品ぞろえを誇っていた。この3日間には周辺の農村から正月の買出しに人が集まり、能勢街道は人も通れないほどにごったがえした。土手嘉も大忙しだったという。岡町にはほかにも料理屋はあったのだが、座敷に上がって食べるような高級な店が多く、ちょっと来たついでに腹ごしらえでもしようという客には、土手嘉のうどんが一番手頃だったのだという。

しかし、なんといっても忙しかったのは、年末の年越そばの準備である。大晦日の晩の一時にすべての注文が集中するので、その準備と配達之苦労は並大抵のものではなかった。そば玉は30日から総勢で夜どおしかけて作っていく。たまに暖冬だったりすると、先に作ったそば玉から腐っていくこともある。そんな時は、暗くなってから近くのため池に捨てに行った。池の魚が食べてしまうので、池を汚すことはなかったという。

30、31の両日があまりに忙しいので、正月の準備のやり方も普通の家とは違っていた。普通の家では、9を含む日付で餅をつくことは「苦が付く」を連想させるので、避けられていた。しかし、土手嘉の場合は、例年29日に餅をついている。「ウチは仕事の関係で、30、31〔日〕忙しいもん、ねえ、そやから29日は昔からそりゃウチの餅つき、決まってますねん」とのことである。逆に29日に餅をつくことは、「福が付く」「福餅」に通じるので好ましいのだ、ともいう。おせち料理の準備は、力仕事のできない女の人が、30、31日にうどんの仕事を抜けて煮しめなどを作る。以前は職人と一緒に食べた。習慣なので今でも作っているが、来客に出す程度で家族はあまり食べないので「最後まで残ってはる」という。

31日の晩は配達に追われることになる。注文が特定の時間帯に集中するのに配達のほうが間に合わず、2時間遅れの配達になることもある。ひところ前は「紅白を見ながら年越そばが食べたい」という注文が多かった。配達の後には容器の回収に行かねばならない。そんなこんなで店を閉めて後片付けを済ませると午前2時、3時になっている。向いの原田神社境内では初詣に人が集まっている頃である。家族と職人が集まって「おめでとういうて1杯」やる頃には夜も明けていたという。

年始は元旦の営業を休んで、2日は昼まで店を開いた。年越そばの売れ残りを処理するためである。職人と年季奉公をたくさん雇っていた頃は、3日を休んで4日から通常の営業を始めた。戦後は家族の働き手を中心に営業しているので、正月休みも家族の都合で休んでいる。最

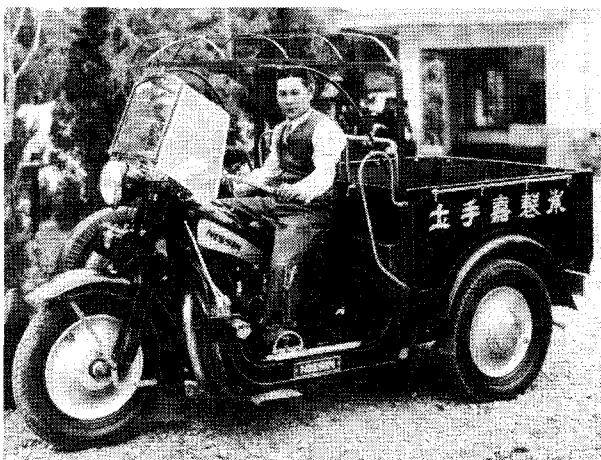
近は1週間ほどの正月休みを取っている。

氷屋の仕事 うどんと並んで土手嘉の営業のもう一つの柱になるのが氷屋の仕事である。先述したように、これは嘉道さんの祖父・嘉吉の始めた事業で、当初は大阪にある製氷会社から氷を仕入れ、荷馬車で運んで能勢街道筋に売り歩いた。運送は岡町在住の荷馬車業者にたのんでいた。嘉道さんの子供の頃で、4軒ほどの荷馬車業者が岡町にあった。やがて商売を手広く行うようになり、荷馬車では時間がかかりすぎて仕事が追いつかなくなったので、フォードのトラックを買って大阪・中ノ島から氷を運ぶという計画を立てた。トラックは、父・秀美が大阪で購入、当時の値段で4千円ほどした。すると、それまで氷を運んでいた荷馬車業者が、それでは商売あがったりなので、氷を運ぶかわりにトラックを貸してほしいと頼んできた。結局、土手嘉の購入したトラックを荷馬車業者にただで貸すかわりに、土手嘉で商いする氷は無料で運送する、それ以外でトラックが空いているときは荷馬車業者が好きなように使う、という仕組みにした。やがて商売をさらに手広く行うようになり、また仕入れ先との行き違いなどもあったので、桜塚に製氷工場を作り製氷から販売までを一貫して行うようになった。昭和8年[1933]頃のことである。

商売の中心は、夏場の冷蔵庫の貸出とその冷蔵庫用の氷の配達である。冷蔵庫といっても、電気冷蔵庫ではなく、1貫5百目から2貫あまり(5.6~7.5kg)の氷を上に入れて、その下に入れた物を冷やすというものだった。当時、現豊中市域で電気冷蔵庫のある家は、原田の伊藤家と曾根の鹿田家の2軒しかなく、相当裕福な家でも氷で冷やす冷蔵庫を使っており、また冷蔵庫のない家も少なからずあった。そこで、冷蔵庫を貸出して毎日氷を配達するわけである。冷蔵庫の貸出も、毎年さらの新品を持って行く所、1年使ったものを持って行く所、2年使ったものを持って行く所、などと貸出方に分けがあり、貸し賃は古くなるにしたがって少しずつ安くなっていった。相当古くなったものは無料で貸し、氷代だけ払ってもらった。各家庭で自家用の冷蔵庫を持っていて、氷の配達だけをする場合もあったが、基本的に冷蔵庫は「夏だけあったらええもん」で、夏場以外は台所に置いても邪魔になるだけなので、自家用冷蔵庫を持つ家は少なかった。貸出した冷蔵庫は1シーズン2、3百個に及んだ。

配達先は、北は蛍池から南は服部まで広がっていた。これだけの範囲を岡町・豊中・蛍池の土手嘉の3店舗でカバーしたわけである。配達のやり方は、ちょうど牛乳配達のように、配達にあたる者がそれぞれの担当の得意先を毎朝順番に回って行くというものだった。配達先の多くは住宅地である。農村地域では、農家への配達はほとんどなかったが、八百屋や雑貨屋など商売をしていて冷蔵庫を使う所もあったので、量は少ないが配達には回っていた。公共施設では刀根山病院にも氷を入れていた。これらの配達に使われたのが3輪オートバイである。排気量は500ccほどで、16貫の氷を4個積むことができた。このような3輪オートバイを土手嘉で

は2台使っていた。「昔やったらそんなの乗ってるこっちゃ、自慢やった」と嘉道さんは語る。



▲水の配達に使われた三輪車。背後は岡町駅。
昭和10年代（畑嘉道氏所蔵）

配達先には豊中の名家も多かった。伊藤家は松坂屋大阪店の社長を務め、原田に住んでいた。玄関の横に勝手口があったが、これが普通の家の門のように立派だった。勝手口をくぐると大きな烏小屋があって孔雀などを飼っていた。伊藤家では年に一度、広い庭に模擬店を出させて人を招待することがあった。土手嘉でも模擬店を出したり水を入れたりすることがあったが、集まる客は地元の豊中とは無関係な「階層の違う」人ばかり

だったという。

岡上の町にあった池田家は、屋号をタダヤといい、地主をしていて「城みたいな家」に住んでいた。この家へ伊丹の白雪酒造から嫁を迎えた時には、嫁入り行列が伊丹から岡上の町まで続いたという。また、梨本宮が伊藤家を訪れた際は、馬車で池田家に寄っていったという。

戦前の岡町・曽根には立派な家が多かったが、中でも立派だったのは現ダイエー曽根店にあった鹿田家であった。昭和のはじめ頃、鹿田家は近くに洋館を建てて引越していったのだが、その建物はそのまま星ヶ丘茶寮に引き継がれ、料亭として使用された。この星ヶ丘というのは、東京に本店をもつ高級料亭で、東京本店では当時の軍と政府の首脳が集まって太平洋戦争を始めるか否かについての相談が行われたという。この星ヶ丘の大阪支店が曽根にあったわけで、大阪へ要人が訪れた際はたいていここで接待された。土手嘉ではこの店に氷柱を入れていた。クーラーのない時分なので、桐製の箱に氷柱を立て、それを座敷のあちこちに置き、扇風機で風を送って冷やす、という具合で座敷を冷房した。嘉道さんが氷を両手にかかえて運んでいくと、後ろから女中さんが、氷から垂れた水を「ぱぁーっと拭きながら」ついてきたという。戦時中、曽根は伊丹空港をねらった爆弾がはずれて落ちることが多く、豊中에서도特に戦災のひどい地域だった。星ヶ丘茶寮も爆弾で焼けてしまい、現存しない。ちなみに、鹿田家の越していった洋館は、現在は裁判所の官舎として使用されている。

4月から5月にかけてのタケノコの季節には、熊野田の熊野田会館前や上新田でタケノコ市が開かれた。土手嘉はここにも氷を入れていた。タケノコは熱で蒸せてしまうと品質が落ちるので、それを防ぐために氷を加えるわけである。セリが終わる頃に氷を届け、業者はその氷を

使って大阪までタケノコを運んでいく。ちなみに、この当時、タケノコに赤土を塗る、という仕事があり、近所の婦人が雇われてこれにあたった。タケノコは土の中にあるうちは白いが、土からちょっと顔を出すとそこから黒ずんでしまう。黒ずんでしまったタケノコは品質も悪く、したがって値段も安くなってしまう。そこで赤土を水に溶かしてタケノコに塗っていくと、黒ずんだ部分も隠れ、おまけに重量が増えて高く売れる、というわけである。

戦後、冷蔵庫の貸出と冷蔵庫用の氷の配達が行わなくなったが、氷の製造と販売は今でも続けられている。昭和30年代、民間航空会社の海外線が再開された頃には、土手嘉蛭池支店が伊丹空港に機内サービス用のかち割りの氷を入れていた。プロペラ機が海外線に就航していたところで、発電装置の性能も悪く、冷蔵庫を動かすだけの電気の容量がなかった。それでも機内サービスはしなければならないので、かち割りの氷を積み込んで飛んでいったのだという。路線は羽田経由でアメリカへ行くものだった。「アメリカ行くのに、ウチの氷積んで行きよった」と父・秀美が笑っていたという。

娯楽とスポーツ 岡町には能勢街道沿いに藤山館という芝居小屋があったが、嘉道さんが子供の頃には歌舞伎の公演に使われることはなく、もっぱら子供の遊び場となっていた。かわって大正末年にできたのが岡町劇場である。岡町劇場は大阪にある歌舞伎舞台・中座をモデルに建てられた劇場で、回り舞台や花道、棧敷を備えた本格的なものだった。

岡町劇場のこけら落としは岡町消防団の素人歌舞伎によって行われた。嘉道さんの父・秀美も参加した。地元の知り合いの演技を見るために地元の人々がつめかけたので、客入りも良好で相当な利益をあげたという。ところが、これに味をしめた消防団の人々が、「ええわぁ、これいっぺんやってみて金もうけしようか」「いっぺんやってもうけたら、酒でいっぺんどんちゃん騒ぎしよう」といって、伊丹で歌舞伎公演することとあいなった。結果は案の定、「だれも入らん、ごっつい損」であったという。

藤山館や岡町劇場の歌舞伎公演はドサまわりのものが中心で、「豆芝居」と呼ばれていた。豆御飯を炊いて詰めた重箱（豆重）を持って行って、それを食べて1杯飲みながら芝居を観たためである。豆芝居は年に4回ほど開催された。

岡町劇場では映画も見せた。もっぱら邦画でチャンバラが中心だった。下駄箱に靴を預けて下足札をもらい、畳敷の棧敷で観た。家で株を持っており、また下駄番やお茶子さんとも顔見知りだったので、嘉道さんはお金を払って観に行ったことはないという。戦後、岡町劇場はマシオンに改築され、その地下が映画館になったが、後に廃業した。

嘉道さんは子供の頃、大阪の道頓堀まで映画に連れていってもらったことがあった。道頓堀では洋画を観ることができた。トーキー映画も初めてここで観た。「そりゃあえらい、お前も行ってみろ、ガラス障子、ガラガラッと引いたら『ガラガラッ』と音するでえ、物言いよったら、

口と同じように物言う、弁士と違うでえ」と言って、トーキーを観たことが学校で自慢になったという。ちなみに、嘉道さんの一番記憶に残っている映画は、第1作目の無声の「キングコング」で、迫力のある動きに当時は感激したという。もっとも、最近ビデオで観てみると動きがごちなく、「うわぁ、こんなの観ててあない感激したんかいな」と思ったそうだ。

そのほか、嘉道さんが子供の頃に連れていってもらった所は、宝塚や箕面の遊園地、大阪天王寺の公園やじゃんじゃん横町、大阪築港の海水浴場などである。父・秀美が茶碗の仕入れや商用で大阪へ出る際には、連れていってもらった帰りに阪急食堂でランチを食べた。普通のランチで25銭、A1（エーワン）で30銭、ランチの中身は今とほとんど変わらず、ハンバーグやエビフライが入っていたという。余談だが、阪急グループの創設者・小林一三は、食券による食堂、電車、劇場、百貨店など「先にお金をもらう商売」しかなかったのだという。

嘉道さんはスポーツマンだった。相撲、スキーなどをたしなみ、銃剣道では国体にも出場している。相撲は岡町でもさかんなスポーツで、3月18日の原田神社の春祭りに奉納される宮相撲はとりわけ有名だった。現在のケヤキ昆布屋の裏あたりに土俵があり、遠くは兵庫県三田あたりからも腕に自信のある若者が集まって相撲を取った。逆に岡町の若者もほうぼうへ相撲を取りに行った。境内は観衆で混み合い、ケヤキに登って見たり、店の2階から見人もいた。相撲好きな人の中には、強い力士を家に招く人もいた。岡会堂や桜塚小学校にも土俵があり、「みんな好きやった」ので練習にも励んだという。

近所の人々と野球に興じることもあった。ガキ大将で親友だった北之坊家の3男が甲陽中学で野球部に入っていて、夏の甲子園にも出ていた。その彼につき合ってボールを受けたりしていたのが、嘉道さんの野球を始めたきっかけである。彼の兄も浪速商業学校で野球部に入っており、やはり甲子園に出場している。そんなわけで野球道具は北之坊家にまとめて置いてあった。当時の豊中には学生仲間や職場仲間で作った野球チームが5、6チームあり、嘉道さんたちも近所の若者を集めて「岡町本通りチーム」を結成した。試合相手が少なかったこともあり、似たような対戦カードでの試合が多かった。克明第3小学校（現大池小学校）などがグラウンドを開放していたので、申込んで利用した。甲子園出場メンバー2名を擁する岡町本通りチームは豊中でも無敵の強さを誇ったという。北之坊家の3男は日鉄に進んで野球を続けたが、後に出征して戦死している。彼が甲陽中学時代から一緒にプレーしていた別当薫は後に大毎の監督を務めている。

土手嘉でも若い衆を集めて野球チームを作っていた。これは若い衆の娯楽のために作ったものだという。というのも、そういった娯楽でも用意しないことには若い衆は職場に落ち着かなかった。住宅地では、自分の家の勝手口まであがって配達に来る人間がころころ変わるのをあまり好まなかった。そこで配達にあたる若い衆が職場に落ち着くように、土手嘉でもいろいろと努力したわけである。

嘉道さんがスキーを始めたのは16歳の頃、同級生だった向いの「ふち屋」さんの2男に誘われて兵庫県城崎の近くの神鍋へ滑りに行って「味しめた」のがきっかけだった。当時、スキーは相当贅沢な遊びで、岡町でもする人はほとんどいなかった。豊中でカメラ屋をしていた人がこのあたりのリーダー的存在で、その人に連れて行ってもらって信州の志賀高原などへよく行った。ゲレンデもなく山スキーが中心だったので、荷物も重



▲土手嘉の若い衆による野球チーム。後列右から3人目が嘉道さん。昭和10年代? (畑嘉道氏所蔵)

装備になり、日程も長くなる。短くても1週間、普通は10日ぐらいいは行っていた。「1月はほとんど[店に]おらなかったんちゃいますか」と嘉道さんは語る。

そんなこんなで、仲間が寄ればハイキングへ行ったり乗馬をしたり「みんなよう遊んだ」という。大阪の道頓堀まで出て飲みに行くこともあった。午後4時頃になると遊び仲間から電話がかかってくる。「おい、お前、なんぼあんねん?」「おれ、2円ぐらいいあんねん。お前は?」「おれ、3円ほどあんねん」「あいつに電話かけてみい、あいつも2、3円ほど持っとんねん」などと言い合って仲間を誘い、お金を集めた。3人で5円もあれば遊ぶことができた。もっとも、市役所職員の初任給が25円という頃なので、決して安い遊びではなかった。連れ立って市役所前からタクシーに乗って道頓堀まで行くと80銭ほどになる。バーに行くとワンコース、ビール1杯とつまみを注文して落ち着いた。馴染みの女の子ができたりすると、女の子の顔を立てるためにフルーツの一つもよけいに注文した。そんな馴染みのいる店が3軒ほどあった。食糧統制が始まると、穀物酒であるビールは1人1杯まで、あとは木葡萄で作った葡萄酒が出されるようになった。それでも常連になると2杯目ぐらいまでは融通がきいた。実は嘉道さんは下戸である。しかし「飲むもんでも飲まんもんでも一人は一人」である。そこでビールをよけいに飲みたい遊び仲間は、嘉道さんに出されるビールをねらい、嘉道さんを誘って飲みに行きたがったのだという。

嘉道さんは下戸ではあったが、バーの雰囲気は好きだったという。たばこもそんな雰囲気の中で覚え、週に4箱は吸っていた。「ゴールデンバット」や箱に飛行船の絵が描かれている高級品「エアシップ」などを吸った。やがて戦時中に外来語の使用が規制され、これらの商標が姿を消すと、「桜」などを吸うようになった。

道頓堀で1軒飲んだ後はタクシーで梅田まで戻って阪急で帰った。タクシーもお金のある所まで乗ってそこから梅田駅まで歩いた。大阪から豊中までタクシーで帰ることは難しかった。帰りに豊中から大阪方面への客を拾うことが困難なので、タクシーが豊中方面まで行きたがらなかったからである。ただし土手嘉では刀根山病院などの公共施設に氷を入れていた関係で、ガソリンの配給券を多めにもらうことができた。統制のため、お金があっても物資が自由に手に入らない時代である。お金のかわりにガソリンの3リッター配給券を渡すと、運転手も喜んで豊中まで乗せてくれた。もっとも、タクシーで帰ることはまれで、多くは阪急で、その阪急の終電にすら乗り遅れることもあった。「そりゃあ梅田からなんべん歩いたかわからへん」。しかし、夜遊びしたからといって翌日の仕事を休むことはなかったので、家族もなにも言わなかったという。

戦中期の岡町 昭和12年〔1937〕に始まった日中戦争を遂行するため、政府は国家総動員法を施行し日常生活にさまざまな統制を加えていった。この統制は土手嘉の商売や岡町のようすを大きく変えて行くことになる。

嘉道さんは勤労奉仕のために宮城（皇居）へ行ったことがある。この時は大阪から130名ほどの青年が派遣され、自転車に乗って5日で東京に着いた。自転車は次の派遣のため、すぐに貨車に積まれて戻された。宮城では掃除や外苑への松の植樹作業にあたった。東京には3日間滞在し、帰りは汽車で帰った。

昭和16年5月22日、嘉道さんは宮城で天皇陛下に拝謁する青年教育実施15周年を記念する「御親謁」の式典に参加した。これは、「青年教育が国家活力の源泉に培ふ重大性に鑑み」（『御親謁拝受者名簿』昭和17年）、日本列島はもとより樺太・朝鮮・台湾・南洋諸島といった「大日本帝国」の各地から、総勢3万4千名あまりに及ぶ学生を召集、宮城の陛下の御前で一同に会させたものであった。豊中市からは学生5名、教官を含めて7名が派遣された。代表の選考にあたっては、各地の警察が候補者を、家の血筋から素行にいたるまで微に入り細にわたって調べ上げたという。上京には特別列車が手配され、東海道本線沿線に集結した代表団を客車を増結させて乗せていった。

式典の当日は、陛下への「御親謁」が始まる5時間前から整列させられた。1時間前にもなると身動きすらできず、「そやから便所にも行かれへん」かった。もっとも、宮城の外にあった便所には集まった数万人もの人間のそれが蓄えられていたので、そこを使ってするのは「とてもやなかった」という。かといって、「こころのなにと、ちょっと社会が違ふところ」なので、近くの物かげでするようなわけにもいかなかった。式典が始まると、1個中隊ごとに隊列を組んで陛下の御前へ行進していく。陛下の右手前には「標兵」という兵隊がいて、隊列の先頭がそこを通過した際に「右むけー、右っ」の号令をかける。すると隊列は一斉に陛下へ頭を向

けて敬礼しながら行進する。陛下の左手前にはもう一人の標兵がいて、隊列の最後尾がそこを通過した際に「なおれゑーっ」の号令をかける。標兵はこの式典に参加した学生の中でもとりわけ名誉のあるもので、正員2名補欠2名の計4名は地方の学生ではなく「向うの人、東京」の学生がその任にあたった。陛下の御前を過ぎると隊列はそのまま靖国神社まで行進し、そこで解散になった。豊中市域で5人という代表の1人として派遣されたので、「これで行くというのが名誉」だったという。

食糧統制は豊中市では昭和15年頃から実施されていった。穀物の統制は特にきびしく、麵類と丼物を中心とする土手嘉の営業は真っ向から打撃を受けた。昭和18年頃には豊中市で共同の製麵工場が作られるようになり、土手嘉の店舗で手打ちのうどん玉を作ることはなくなった。土手嘉の店舗では、何食分かを指定されて政府から配給された食材を用い、雑炊や水団（うどん粉で作った雑炊）を作って配給の切符と交換した。客は朝早くからオミヤサンに並んで配給を待ったという。製麵の作業がなくなり、男の働き手も次々と戦争に召集されていったので、土手嘉は広い店舗をもてあますことになった。そんな折、嘉道さんの祖母の縁故の人が露店でボタン屋を営んでいた。露店では吹きさらしで寒かろうということで、土手嘉の軒の一部を貸して店を出させることになった。これが現在まで続くツルタのボタン屋である。

食糧統制で仕事の内容が変わったのは土手嘉ばかりではない。牛乳の配達とパンの製造・販売を行っていたマルジュウは、牛乳の仕事を人手に譲り、店主は「営団」という北摂地域のパン・まんじゅう類の共同工場に勤めるようになった。清酒の醸造と販売を行っていた良本酒店は醸造をとりやめ、酒類の販売の鑑札（認可証）を向いの飯田米店へ譲った。良本醤油店も同様に醤油の醸造をとりやめた。これらの商店のなかで、戦後に製造部門を再開したものは一つもない。食糧以外のものも含めて、これらの統制は商業地としての岡町のあり方を変えていった。空襲の被害がほとんどなかったにもかかわらず、戦争の岡町への影響は決定的だったのである。

昭和19年頃、空襲や火災に備えるため、曽根駅から豊中駅にかけての阪急沿線で建物の強制疎開が行われ、線路の両脇に道路が通された。岡町駅前にあった汽車長屋もこの時の疎開で姿を消している。

出征と復員 昭和18年〔1943〕、21歳の嘉道さんは兵隊検査を受け、甲種合格で出征することになる。行き先は中国大陸。上海・南京・武漢・洞庭湖・長沙・石家荘など「中支」から「北支」にかけてを転戦した。

嘉道さんは山砲の部隊に配属された。山砲とは大砲の1種である。普通は野砲という砲を用いるが、これはそのまま馬で引いて運ぶので狭い所を通れない。それでは歩兵と一緒に行動できない。しかし、陣地を攻略するためには重火器が不可欠である。そこで分解して運べるよう

にして機動性を高めたのが山砲である。1門の砲を分解して7頭の馬で運んだ。弾薬は1頭の馬に8発積むことができた。馬の行けない狭い道では、人手で砲を運んだ。1mあまりある砲芯は2人がかりだった。

部隊は砲手、観測班、通信兵などに分かれる。観測班が山砲と攻撃目標の両方が見える場所へ行き、三角測量で目標までの距離と角度を計算する。観測班から砲手へ「距離なんぼーっ」と連絡を入れる。連絡は、通信、伝令、手旗信号など、状況に応じてさまざまな手段がとられた。1門の砲には「一番」から「五番」まで5人の砲手が配置に就くが、砲を撃つために不可欠なのは一番から三番までの3人である。三番が砲に弾と火薬を装填する。一番が観測班からの連絡にしたがって砲の角度を修正する。二番が撃鉄を引いて発射する。嘉道さんもすべて一通りの訓練は受けたが、「やっぱ成績のええやつから楽なところへ就きよる」ので、砲手に配置されることが多かった。また、部隊が中国大陆の奥地へ進み兵員の補充がなかったので、最後まで一番下っ端だったという。

1発目で目標に当たることはまれである。弾がはずれると、観測班は目標と着弾点の誤差を計算し、再び距離と角度の指示を出す。これを目標に当てるまで繰り返すわけである。3発目で当たれば上出来だった。装填された火薬の量は一定なので、着弾距離は発射角度によって調整した。また、砲それぞれにもその砲のクセのような誤差があったので、砲芯の周囲に取り付けられた防盾（弾よけ）の裏には砲のクセが書込まれており、砲手も自分の担当する砲のクセを熟知していた。陣地の攻略にあたっての山砲の役割は、相手の重火器を破壊し歩兵の突撃を容易にすることにある。陣地の重火器が砲撃してくると、観測班は砲火を目印に目標を定める。とりわけ夜間の戦闘においては恰好の目印になる。陣地のほうでも、相手側の重火器による攻撃が始まると、攻撃目標にされることを恐れて重火器の使用をとりやめた。事前に「何発目で突撃」と作戦が決められており、味方側からの砲撃がその回数に達すると、それを合図に歩兵が突撃して陣地を攻略した。

移動は徒歩の行軍がほとんどだった。制空権はすでにアメリカ軍に握られており、「飛んで来おったら向うの飛行機」だった。鉄道は中国軍が退却する際にズタズタに切断しており、使いものにならなかった。水路はあっても船はなく、たとえあっても岸から恰好の攻撃目標にされた。「歩かなしゃあない」状態だった。それも夜間行軍が大半である。毎日40Km。3、4日に1度は休憩日があったが、疲労は極限に達していた。「そりゃあ悲壮なもんやったよ」と嘉道さんは語る。

昭和19年6月11日、長沙にいた嘉道さんは田んぼの中で戦闘機の爆撃にあった。弾の破片が腹部を貫き、いくつかの破片は体内に残った。重傷である。不幸中の幸いで、半年に1度やってくる食糧輸送船が、被弾した3日後に長沙に到着、負傷者は帰りの船で岳州の野戦病院まで運んでもらえることになった。物資不足の折、まだ使うことのできる衣料品は兵服から下着に

いたるまで身ぐるみをはがされ、ふんどし一丁に毛布1枚を与えられて乗船した。野戦病院へ運ばれる途中にも、傷はどんどん化膿していく。ただでさえ温暖な長沙、しかも夏場で身につけているのは毛布1枚、暑さのために傷口はいやおうなく広がっていった。田んぼで負傷したため、傷口を泥水につけてしまったことも傷の悪化を速めた。腐敗した傷口には蠅がたかる。はじめのうちは追い払うが、蠅は卵を落としていく。そのうち背中がムズムズすると思って見ると、大量に虫が発生している。その頃になると虫を追い払う気力も体力もなくなっている。「ほったらかし」である。野戦病院に着いて看護婦に虫を落としてもらおうと、腐敗した部分はすべて食べつくされてなくなっていた。破片を取り除き、肋膜に溜まった血を背中に針を刺して抜いてもらう。野戦病院には結局1年あまり入院した。

野戦病院を退院してから、部隊に追いつくために北支の石家荘へ向かうが、結局部隊へは追いつけず昭和20年8月15日の終戦をむかえる。そのまま中国軍の捕虜となり、使役に就くこととなった。強制労働ではなく、志願して従事したという。土手嘉で配達の実験があり自動車の運転ができたので、運転手として働くことができた。「そやからラクしましたよ」と嘉道さんは語る。

日本へ復員したのはその1年あまり後である。アメリカの上陸襲撃艇「エレスビ」の3段ベットのある船員室に寄せられた。多くの兵隊が貨物室に寄せられて寝る場所も満足に与えられなかったことから比べると、破格の待遇である。もっとも、海路はけっして穏やかなものではなかった。上陸襲撃艇は船底が浅く、普段は戦車などを積むところを人間しか乗せていないので、船が安定せず、玄海灘の荒波にまともに揺られることとなった。食事も3食きちんと用意されるのだが、船酔いで誰も食べられなかった。デッキには張り出した小屋のような「水洗」便所が設けられていたのだが、荒波にさらわれて明るく朝にはなくなっていたという。船は仙崎（山口県長門市）にたどり着き、そこで解散になった。

この時、嘉道さんは傷の後遺症で左手で物をつかむことができなくなっていた。腰痛もあった。しかし、ここまで来たからには早く自分の家へ帰りたいという一心で岡町までたどり着いた。帰ってからは、体の自由がきかないので、ご飯を食べては寝転がるという生活がしばらく続いた。知り合いのマッサージ師の治療でようやく治してもらった。しばらくは、「兵隊行ってたもん、みな引っ張られて、なんやこう、労働さされるぞう（させられるぞう）」というようなうわさが流れたこともあって、兵隊に行ったことを表立っていうことは少なかった。やがて、恩給制度が整備されたのでその申請に行くと、従軍中の負傷であることを証明する書式が必要であることを告げられた。ところが嘉道さんは、復員の際には仙崎の病院へ寄らずまっすぐ岡町まで戻っている。中国の野戦病院では終戦直前の混乱のため、入院証明の書類は受けなかった。部隊の上官も戦死しており、嘉道さんの負傷を証明する書類を書くことのできる立場にいる人は一人も生き残っていなかった。そんなわけで、従軍中の負傷であるにもかかわらず、

嘉道さんは傷痍軍人手当を受けることができなかった。

それでも嘉道さんは自分は運が良かったのだと思っている。軍隊では「運が一番やね」という。左の腹部を貫通した破片は、もう少し上を通っていれば肋膜・肺・心臓を貫いて命を失っていただろうし、もう少し横や下を通っていれば脊髄や腰をやられて半身不随になっていたであろうという。負傷直後に食糧輸送船で野戦病院へ運んでもらえたのも幸運な偶然だった。嘉道さんの体の中には今でも鉄片が残っていて、レントゲン撮影で医師が驚くこともしばしばある。鉄片のまわりを肉が巻いてしまっているの、腐食して体に悪影響が出ることはないという。左腹部に刻まれた直径10cmあまりの弾痕は今でも鮮明に残っている。

嘉道さんの部隊仲間は「椿砲友会」という会を作っている。会員は全国に散らばっているが、今でも年に1度は集まっている。もっとも、病氣や死亡のため、年月が経つにつれて参加者は減っている。

部隊では、理由もなく上官に説教されたり殴られたりすることも多々あった。そんな時、「自分は悪いことないのにやられた」と思う人間はノイローゼ気味になっていった。逆に「全体責任だからしょうがない」と納得できる人間のほうが軍隊生活に適応できた。嘉道さん自身は、上官に「わけのわからん説教」をされるよりも、「カーンの一ついかれたら（殴られたら）もうまいでしょ、もう殴ってくれよったらええのになぁ」と思うほうだった。「つらいことというのはすぐ忘れてしまう」し、「面白いことはわりにいつまでも残っている」。そういうお気楽さと運の良さが軍隊から生きて帰ってくるためには大切なのだという。そして嘉道さんは軍隊時代をこう振り返る。「しかし、おもろかったでっせ」。

終戦後の岡町 敗戦とそれに続く政治的・経済的・社会的な変動は、岡町のようにすにも大きな影響を与えていった。アメリカの駐留軍人、空襲で大阪市内から焼け出された人、朝鮮・台湾などの植民地から引き揚げてきた人、復員軍人、そういったさまざまな人の流れが戦後の岡町の暮らしを作り上げていった。

闇市の形成とその整理にともなう商店街の再編はとりわけ注目に値する。極度の物資不足と流通の混乱は全国各地に闇市を林立させることになったが、岡町では原田神社の境内に闇市が形成された。神社側としては早急に場所を空けてもらいたかったのだが、露店商側も生活がかかっているの、そう簡単に店をたたむことはできなかった。そこで境内の中央部を空けるかわりに、境内の能勢街道沿いの部分にバラックの建物を建てて露店商を入居させるという救済策が行われた。この方法は成功を収め、すぐに岡町商店街側と駅前通り側の境内地も同様に貸出され、商店街がつくられることとなった。その際、境内を囲んでいた石垣は取り除かれ、玉垣は境内の中へ移築された。能勢街道側のバラックの裏には、今も石垣が残り、かつての面影をしのばせている。これらの新商店街ができた結果、岡町の商業活動の中心は、かつての能勢街

道から、阪急岡町駅から市役所を結ぶ通りへと徐々に重心を移していくこととなった。

食糧統制は戦後も続けられた。岡町・桜塚にあったため池の多くは埋立てられ、食糧増産のために畑に転用された。戦時中、豊中市内のうどん玉卸業者が集まって共同工場を桜塚に建てていた。戦後はこの工場で製造したうどん玉の家庭配給を行った。政府から何食分という指示とともに配給のメリケンを購入する。各小売店はそれぞれの町内に住む人の数から何食分のうどん玉が必要なのかを計算し、工場に注文を出す。小売店からの注文と配給を受けたメリケン粉の量をつきあわせてうどん玉を製造、小売商へ卸していく。この際、うどん玉の工賃を工場の収入とし、小売商から集金したお金で再び政府からメリケン粉を購入するわけである。嘉道さんの父・秀美や嘉道さん自身もこの工場で働いた。

土手嘉が店舗営業を再開したのは昭和25年〔1950〕頃である。食糧統制が次第に解除され、闇米などの闇ルートも含めて食材を仕入れるめどが大体立ったからである。古くからの商売関係のある仕入れ先にもいろいろと融通してもらったという。メニューも戦前とほぼ同じものだった。働き手は、父、母、嘉道さん、妻の妙子さん、計4人のこじんまりとした家族営業である。共同工場は、それまで一緒に仕事をしていた人に譲って、土手嘉の仕事に専念することにした。この工場は今も桜塚で営業を続けている。

嘉道さんが妙子さんと結婚したのは昭和24年3月のことである。昔ながらの見合い結婚だった。妙子さんは箕面市新稲の出身で、隣接する池田市畑には嘉道さんの母方の祖父が住んでいた。隣村で互によく知っていたので、その縁で紹介されたという。まだまだ物資の乏しい時期であり、妙子さんは嫁入りの際に道具と一緒に4斗俵の米1俵を持参した。

結婚式は原田神社で神前結婚を行い、その後に土手嘉の2階で内輪だけの披露宴を設けた。料理は近くの板前さんを雇って土手嘉の店で作ってもらった。お膳の類は土手嘉にあった漆器を用いた。「そういった道具が全部あるわけよ、古い家は」と嘉道さんは語る。「田舎は近所隣が全部こしらえに来はるけど、ここらそういうのなかったからね」と、農村から嫁入りしてきた妙子さんは、結婚式のやり方の違いを思い出す。もっとも「主役やさかい、きょうきょう見れへんかった」という。

困ったのは披露宴用の魚の仕入れである。当時は統制対象になっていた「背の青い魚」を、大阪の仕入れ屋に頼んで横流ししてもらった。結婚式の朝、嘉道さんが自転車で大阪まで取りに行った。ところが帰りに十三の警察に見つかってしまったのである。当時、岡町には交番所があり、その警官が土手嘉の常連客だった。そこで十三の警察からその警官に連絡をつけて事情を説明してもらい、「結婚式だから」と大目に見てもらってようやく魚を持ち帰ることができた。昼間になっても婿が帰ってこないで、岡町では家族が気をもんで待っていたという。

昭和30年代、阪急岡町駅から市役所を結ぶ道で、岡町商店街から桜塚商店街にかけてアーケードの敷設が行われた。完成記念式典では、ちんどん屋を雇って盛大にお祝いをした。このアーケード

ドの完成によって、能勢街道沿いに対するアーケード沿いの商店街の優勢がほぼ確定することとなった。

神事と仏事 嘉道さんは神社関係と寺関係のことには「無関心」なのだという。土手嘉の旦那寺は代々順正寺で、池田市住吉の浄土真宗の寺である。岡町・桜塚には5軒の壇家があり、このうち1軒が寺総代として5軒のとりまとめ役を行っている。古くからの家が多く、土手嘉初代嘉吉の兄弟であった八百伊の子孫も含まれている。

嘉道さんいわく、浄土真宗は『門徒物知らず』いうて、なんにも知らんしね、そやけどその、教えでもね、死んだとたんにもう極楽浄土してると、そやから別に祀らんかてええいうな宗教」なのだそうである。商売人向きの宗教である。「お正月やさかい、盆やさかい、先祖お迎えしてなんやこう、そんなのありませんねん」と、特別な儀礼があるわけでもない。順正寺で講行事などが行われても、店の仕事が忙しいので行くことはほとんどない。順正寺でも、嘉道さんの母が亡くなった時には「枕経も読みに来いへん」かった。

それでも月参りだけは欠かさず来てもらっている。以前は先祖の命日に参ってもらったが、最近では岡町・桜塚の壇家をまとめて毎月20日に参ってもらっている。お布施と電車賃は正月の初参りのときに1年分渡してしまう。家の仏壇でお経をあげてもらう。土手嘉では店の仕事で忙しいことが多いので、知らないうちにオジュシサン（住職）が「勝手に家上がって」お経をあげ、知らないうちに「勝手に帰って行く」ことが多い。たまたま手のあいている時は「オジュシサン、コーヒー立てましょか、お茶でも入れましょか」と接待もできるが、普通は店の仕事が忙しくて「かまわれへん」という。オジュシサンのほうでもそのほうが気を使わなくて楽なのだという。

土手嘉の店内には黄檗宗貫長の筆になる書が額に納められて飾られている。嘉道さんの祖父・嘉吉の姉が京都のお寺へ嫁入りし、後にその夫婦が桜塚の瑞輪寺に入って住職となった。そんなわけで土手嘉と瑞輪寺は親戚関係にあり、その縁で額をもらったのだという。そもそも黄檗宗は江戸時代初期に中国から京都宇治の万福寺に高僧を招いて開かれたもので、禅宗3派のうちでは最も新しい宗派である。寺院数も少なく、北摂地域では、岡町、池田、三田にそれぞれ1



▲岡町商店街のアーケード完成記念式典。
昭和30年代（畑嘉道氏所蔵）

つつつである。黄檗宗寺院は壇家をもたないので、壇家のお布施という収入源がなく、江戸時代は幕府から土地を与えられて寺を営んでいたという。しかし、明治になってからは経済的にかなり逼迫するようになった。そこで寺で行事などがある際には、世話好きな祖父・嘉吉が姉を助けるために「たったたと」店から料理を運んだという。先々代の住職「金龍さん」は嘉道さんの父・秀美のいここにあたる。金龍さんは「ようできた人」で、幼稚園を開いたり、日曜学校を開いて「そこのワル集めて」勉強を教えていたという。瑞輪寺境内には土手嘉から贈られたイチジクの木が植えられている。

嘉道さんの母の葬式は複雑だった。仏事は基本的には旦那寺の順正寺にやってもらうのだが、祖母が亡くなった際にはオジュシサンが忙しくて枕経をあげてもらえなかった。そこで枕経は親戚である瑞輪寺にたのんであげてもらった。お通夜・葬式は瑞輪寺を借りておこなった。お通夜と葬式のお経は順正寺のお坊さんがあげたのだが、そこに親戚である瑞輪寺住職が加わるようになった。浄土真宗のお坊さんに黄檗宗のお坊さんが加わったわけである。葬式のやり方も宗派によって違うので双方気まずかったという。

もともと岡町では、商店や長屋が多く、自宅を式場にできる家がまれだったので、瑞輪寺や岡会堂を式場に葬式をあげることが多かった。近隣の家15軒ほどが1組になって葬式組を作っていた。葬式の際には組の人が協力して準備にあたったという。戦後に葬式組はなくなり、式場や葬式の準備は市役所前にできた葬礼業者の加茂会館にたのむことが多くなっている。

嘉道さんは神事にもあまり関心がない。原田神社の行事にかかわることもあるが、それは神事というよりは町内の仕事としてである。また、氷の仕事をしている関係で、氷の神をまつている奈良の氷室神社からお札が送られてくる。製氷工場の職員から集めた会費でお札を買って工場に飾るぐらいで、それ以上のことはないという。ちなみに、嘉道さんは目の前に原田神社があるにもかかわらず、初詣に行ったことがない。「駅行くのに近いから、前素通りして行くだけで、手合わせたことない」のだそうだ。

商売人気質 岡町を単位とする集まりには、子供会、老人会、理事会、青年会、消防団（または警防団）などがある。土手嘉の当主は代々これらの仕事を務めることが多かった。祖父・嘉吉や父・秀美は岡町の理事や原田神社の氏子総代などを務めた。嘉道さんは理事や消防団分団長を務めた。

青年会は岡町の青年男子の加入する集まりである。尋常高等小学校を卒業してから徴兵検査を受けて軍隊に行くまで、数えて15歳から21歳までのあいだ加入した。兵役から戻ってくると今度は消防団に加入する。正式名称は豊中市消防団克明分団で、範囲は克明小学校の学区と重なる。こちらは数えて24歳以上である。いずれも主な任務は防火・防災などである。戦後に青年会はなくなり、かわって子供会が作られた。こちらは小学校児童とその親のための集まりで、

お互いの連絡と親睦をはかることが主な目的である。

理事会は区長をはじめとして理事（町の役員）が集まり、岡町の1年間の収支を管理するのが目的であり、毎月1回は会合をもっている。もっとも、収入の使い道の多くが原田神社の祭りに関係するため、実体としては氏子組織との区別がつきにくい。区長が氏子総代を兼ねることも多い。氏子総代の仕事は要するに「金集め」である。それも「こっちからなんぼ持ってくるやなしに、向うからなんぼくれて来はる」、つまり神社から町内の氏子の数によって金額が割り振られ、その金額を神社へ納めるわけである。父・秀美は「一銭にもならんのに、頭下げて、もうかなわんなぁ」言いながら氏子総代の仕事していたという。

現在、岡町では区費を徴収していない。急速な都市化により地価が高騰し、町有の不動産から上がる収益のみでまかなえるようになったためである。岡会堂も岡町所有の不動産の一つである。岡会堂は岡町の集会所兼物置で、もともとは土蔵造りの建物で、隣には相撲場が造られていた。中には岡町の祭礼関係の道具が納められ、また町の集会や葬式場としても使われた。それが嘉道さんの子供の頃に建て替えられ、普通の家屋になった。この岡会堂をレンタルするようになったのは戦後のことで、日本舞踊、詩吟、空手、柔道、体操、合気道、和裁、洋裁、手編み、着物着付、民謡など、おもにサークル活動に使われている。このレンタルの収入で町の支出がまかなわれるわけである。最近、下は駐車場、上は集会所という2階建ての建物に建て替えられた。駐車場は向いの豊和信用金庫へ賃貸している。

土地の売却も行った。能勢街道沿いにはもともと池田警察署岡町分室、後の岡町警察署があったのだが、これは昭和7年〔1932〕に桜塚へ移転した。それでは治安に悪いということで、かわりに町有地に交番所が設置された。この交番所もやがてなくなり、しばらく空き地になっていた。ここを道路にする計画が立てられたので、市に買上げてもらうことにした。「ちょうどバブルのええ時でしたわ」という。この売却益によって、先の岡会堂の建て替えや原田神社の祭りのためのだんじり（山車的一种）の購入が行われた。

だんじりを買った経緯はこんなふうだ。土地の売却益で子供のために何かしようと、だんじりを買うことが提案された。そこに原田や走井など、かつての農村地域の村々がだんじりを新調したということが知らされた。もともと岡町に住んでいた人たちが「同じ作るんやったら、ヨソのよかちっさいとかおっきいとか言われるより、おっきいの作れえ」と言い出した。新しく住み着いた人たちも同意し、結局、原田や走井の倍ほどもする600万円あまりのだんじりを購入することになったという。

もともと岡町は商売人が多く「小銭がまわった」ので、派手好きで見得っ張りな気質があるのだという。実のところ、岡町と農村地域の経済状況は逆転し、現在ではかつての農村地域のほうが裕福になっている。戦後の農地改革で手に入れた農地が、その後の急速な都市化にともなって高騰したためである。対して岡町は土地を売るほど余分に持つ者は少ない。農地改革で

土地を失った者も少なからずいる。結局、「どんどんどん、さびれていく一方」なのだという。にもかかわらず、昔ながらの商売人気質は健在で、「いまだに自分らに残ってますよ」と嘉道さんは語っている。

新住民の流入は岡町の組織運営にも大きな影響を与えている。その一つが原田神社の祭りの運営方法の変化である。先にも述べたように、岡町はもともと町の組織と氏子組織との区別がはっきりしなかった。この点で町内会とは別に祭祀組織として奉讃会をもつ桜塚の場合とは異なっている。しかし近年、新住民の流入により、岡町に住んでいても原田神社の氏子にならない人が増えてきた。また、人口は増えているのだが、マンションなどに住む人が多く、もともと地の家の数はむしろ減る傾向にある。その結果、祭りの運営にあたる人手が足りなくなってくる。「子供会の応援たのまへんかったら、太鼓叩くのも具合が悪い」という状況である。もともと理事会や氏子組織は地元で商売をする人を中心に運営されたものである。時間的制約から通勤者が参加しにくいことは事実である。しかし、新住民の子どもは祭りへの参加を希望することが多かった。そこで数年前から、祭りの運営は子供会を中心にして行うようになった。祭りの運営は子供会の主催とし、収益は子供会の収入とする、理事会は町の予算から補助を与え、運営の手助けをする、という仕組みが取られるようになった。同様に、理事会は消防団や老人会にも補助を与えている。

平成7年〔1995〕1月17日、阪神・淡路大震災がこの地を襲う。土手嘉では大きな被害はなかったが、付近で被害を受けた家屋は多い。能勢街道沿いの商店街にも、ぼつぼつと空き地が目立つ。市から罹災した家屋へ改築費の補助が行われたこともあって、建物の取り壊しと新築は急速に進んでいる。現在、店の仕事は嘉道さん夫婦と息子夫婦によって営まれている。仕事の内容はうどんのほか、昭和40年代から始めた寿司の販売も行っている。客層は市役所関係者と金融関係者で7割ほど、最近では震災の影響で建築関係者も増えたという。

おわりに　すでに原稿用紙にして80枚分あまりの紙数を費やしてしまった。それでも大正・昭和・平成の3代にわたって生きてきた嘉道さんの人生はまだ奥が深く、書き記せなかったことはあまりに多い。土手嘉の歴史についてもそうであるし、岡町や豊中の歴史の豊さに比べるなら、この文章はまるで大海の1滴のしずくのようなものである。

また、聞き書きという方法そのものの持つ限界もある。聞き書きはその時代を担った一人一人の人間の実感をとらえることができるというメリットがある。一方で、聞き取りのできる年代は100年をさかのぼることはまれであるし、記憶違いということも人間である以上いたしかたない。聞き手である調査者の記憶違い、書き間違い、知識の不足による誤解といった問題もある。

にもかかわらず、ある個人の人生についての語りを聞き、それを書き記すという作業は、大

げさな物言いになってしまうが、流れゆく時の中を人が生きていくことの意味、さまざまな人間関係の中で人が暮らしていくことの意味、そういったものを教えてくれているのだと思う。少なくとも僕は嘉道さんからそういったことを学んだのだと思う。快く時間を割いて多くを語ってくれた嘉道さんに深く感謝の念を捧げたい。

そして、繰り返すが土手嘉の歴史というものは岡町の商家の「典型」でもなければ「標準」でもない。岡町の歴史を見つめ直すきっかけは、そこかしこに潜んでいるのだろう。変わってゆくマチバの変わってゆく記憶から学ぶべきことは、まだまだありそうだ。

追記 都市民俗誌——都市に生きる人々の経験を描き出すこと——，それは一体，いかなる対象に対するいかなる方法を要請しているのか。この問いを考えるための予備作業として書かれたのが本稿である。

1980年代初頭，いわゆる「都市民俗学」は，久しく方法論的停滞にあえいだ日本民俗学に，新機軸として華々しく登場したかのようにみえた。民俗学において＜都市＞という問題領域が浮上する遠因をなしたのは，農山漁村といった伝統的フィールドが高度経済成長により急激に変容していったという現実であり，その一方で，文化財保護制度や市町村史編纂の拡充により，＜民俗＞の記述が，これまで蓄積の薄かった都市域においても要請されるようになったという制度的誘因である。

もっとも，従来対象化されることが稀だった＜都市＞という問題領域を既存の民俗学の問題系に接続させる作業は，多様な方向に拡散した。特殊な伝承を保持することにより従来から比較的研究の多かった都市における職人・商人の研究に加え，研究史に厚みのある祭礼研究を都市にスライドさせた都市祭礼研究，「口裂け女」のような都市空間に浮遊するうわさを追求した都市伝説研究，ムラに相当する伝承母体を「団地」などに措定する都市的社会集団の研究，『都市と農村』[1929]をはじめとする柳田国男のテキストに民俗学的都市論を求める「聖典」解釈的研究，などなどのアプローチが試みられた。

しかしその帰結は，対象と問題意識の拡散による都市民俗学というジャンルそれ自体の分解であり，ひいては民俗学という方法の同一性それ自体の解体であった。都市民俗学という問題系が焦点を失った一方，制度的誘因により都市の民俗記述はいかかわらず惰性的に量産され続けている，というのが現状のように思われる。このような状況において，＜都市＞と＜民俗＞という問題系を接続することが，いかなる可能性と限界をもたらすのか，改めて問い直すことも無意味ではないだろう。

とはいうものの，本稿はあくまでそのような問題意識を念頭に置いた上での徹々たる予備作業に過ぎない。理論的考察とは対極の記述的实践をめざした本稿が，いかなる意図によって構成されたかを，蛇足ながら一言しておきたい。

第1は、民俗誌記述を支える既存のフォーマット、分節化の枠組みを問題化することであった。オーソドックスな記述のフォーマット——地理的・歴史的な概況に続き、生業の説明がなされ、社会組織を解説した上で、信仰、祭礼、伝説・昔話といった心意にウェイトを置いたジャンルに到達する、といった類の——は、調査や記述、読解の指針として便利ではあるが、フォーマットからこぼれ落ちる現実の諸側面を不可視にしまうという弊害をともなった。祭礼行事が無批判に記述対象に設定される一方、戦争経験はほぼ自動的に対象外に排除される。その際、往々にして記述対象たる空間・社会関係は、ムラといったものに単一化・一元化されることとなる。しかし、いうまでもないことだが、人々の生そのものが、そのような研究者の用意した単一の枠組みに収まりきるわけでは決してない。このことは、とりわけ〈都市〉においてあてはまる。人々の生は、さまざまな社会空間、さまざまな社会集団を交錯して営まれるものであり、そのような人々の生に肉薄することが民俗誌の課題であるならば、それを可能にする新たなフォーマットが模索されてしかるべきである。本稿が嘉道さんという一個人のライフヒストリーを中心に、およそ〈民俗〉らしからぬ要素も含めて雑多な要素を配置していくという構成をとったのは、以上の問題意識によるものである。

第2は、「語り」を積極的に利用していくことであった。そもそも民俗誌調査は、歴史的な具体性を帯びたインフォーマントと、同じく歴史的な具体性を帯びた調査者との、極めて個人的な関係に決定的に依拠している。しかしながら、記述の段階でこの個性は容易に解消され、インフォーマントの個性を消去した体系的・整合的な対象文化の像が立ち現れ、記述者も個性を欠落させて対象文化を鳥瞰的に記述する中立的な存在へと変質してしまう。学的産出の一形態がそのような抽象化のレベルにあり得ることを認めるにせよ、やはり違和感を禁じ得ない。「人々の生に肉薄する」という当初の目論見と、そのような抽象化のレベルとの乖離が、被いようもなく露出するからだ。そこで本稿では、嘉道さんの「語り」のもつ豊饒さを經由して、失われた「個性」の面白さを回復することを目論んだ。口語的な文体の採用も、これに付随したものである。もちろん、「語り」は語られた出来事の歴史的実在性を保証するものでもなければ、その「語り」を書き起こすことがその十全な再現となるわけでもない。にもかかわらず、「語り」という実践がなされたことは相対的に確かであり、その「語り」のアクチュアリティの可能性は考えられてしかるべきである。

以上のような本稿の意図が、どの程度実現されたかに関しては読者の判断を待つこととしよう。

なお、現在進行中の『新修豊中市史』民俗篇の関係者に誘われて岡町の調査に参加したことが、私がこの地に関わったきっかけである。当初、民俗篇の一部として構想された本稿は、結果的に採用されることはなかったが、上記のさまざまな問題を具体的なフィールドを通して考える契機を私に与えてくれた。関係者の方々に感謝の念を捧げたい。

最後に、嘉道さんの妻・妙子さんは、本稿作成中の平成8年〔1996〕に逝去された。妙子さんが、「兄チャン、背高いなァ！」と声をかけてくれることがなかったなら、本稿がこのような形にまとまることはなかっただろう。妙子さんの冥福を祈りつつ、ここに筆を置く。

〔参考文献〕

- 石川純一郎・岩井宏実・和田正洲・西垣晴次「シンポジウム：地方史誌編纂と民俗学」（1979年『日本民俗学』121）
- 神崎宣武『盛り場の民俗史』（1993年 岩波新書）
- 小林忠雄・岩本通弥・倉石忠彦・他「シンポジウム：都市の民俗－城下町を中心に－」（1981年『日本民俗学』134）
- 小林茂『わが町の歴史・豊中』（1979年 文一総合出版）
- 佐藤建二編『21世紀の都市社会学 3 都市の解読力』（1996年 勁草書房）
- 津金澤聰廣『宝塚戦略 小林一三の生活文化論』（1991年 講談社現代新書）
- 寺本知『魂の糧 にんげんを求めて』（1997年 解放出版社）
- 豊中市史編纂委員会編『豊中市史』全8巻（1959－63年 豊中市）
- 中野卓・桜井厚編『ライフヒストリーの社会学』（1995年 弘文堂）
- 中村孚美・北見俊夫・萩原竜夫・藤井正雄・上野和男「シンポジウム：都市と民俗学」（1978年『民俗学評論』16）
- 西澤晃彦「『地域』という神話－都市社会学者は何を見ないのか？－」（1996年『社会学評論』47／1）
- 藤本篤・前田豊邦・馬田綾子・堀田暁生『大阪府の歴史』（1996年 山川出版社）
- 松平誠『ヤミ市 幻のガイドブック』（1995年 ちくま新書）